

小学校高学年における首尾一貫感覚 (Sense of Coherence; SOC) ・ ストレス対処行動・ストレス反応の関連構造

046

○ほうとうげ しゅうこ朴 峠 周子¹⁾, 武田 文¹⁾, 浅沼 徹²⁾, 門間 貴史²⁾, 藤原 愛子¹⁾,

鈴木 淳子¹⁾, 鈴木 梢子²⁾, 木田 春代¹⁾

1) 筑波大学大学院 人間総合科学研究科 ヒューマン・ケア科学専攻

2) 筑波大学大学院 人間総合科学研究科 体育学専攻

【背景】近年、小学校高学年児童における精神健康問題が指摘されている。成人においては、ストレス対処能力や健康保持能力の概念を表す「首尾一貫感覚 (Sense of Coherence 以下, SOC)」が、適切なストレス対処行動を促し、ストレス反応を抑えることが示唆されているが、小学校高学年については検証されていない。

【目的】本研究では、小学校高学年におけるSOC・ストレス対処行動・ストレス反応の関連構造を明らかにした。

【方法】神奈川県内の公立 A 小学校に通う 4～6 年生児童 402 名を対象とし、2009 年 10 月に無記名自記式質問紙を用いた集合調査を実施した。分析対象は、回答が完全であった 318 部 (79.1%) とした。分析には、首尾一貫感覚 (SOC) 得点、4 件法による 12 項目のストレス対処行動頻度、ストレス反応得点、属性 (学年・性別) を用いた。まず、SOC 得点・各ストレス対処行動頻度・ストレス反応得点について属性による比較を行った。次に、ストレス反応得点と各ストレス対処行動頻度 (1～4) との単相関係数を算出し、SOC・ストレス反応と関連があったストレス対処行動・ストレス反応に関する共分散構造分析を行った。分析モデルでは、SOC 得点から各ストレス対処行動とストレス反応得点に対するパス、各ストレス対処行動からストレス反応得点に対するパスを設定した。

【結果】SOC 得点については学年・性別間に有意な差は認められなかったが、ストレス反応得点、および「だれかにどうしたらよいかを聞く」「ひとりで泣く」「何がその原因かを見つけ

る」対処行動をとる者の割合は、いずれも女子が男子よりも有意に高かった。共分散構造分析は性別に行い、各モデルは良好な適合度を得た (男子: NFI=.943, CFI=.983 女子: NFI=.910, CFI=.969)。男子におけるパス係数は、SOC 得点から、ストレス反応得点 (-.55)・ストレス対処行動「ひとりで泣く」(-.44)・「ひとりになる」(-.42)・「どうしようもないのであきらめる」(-.35)・「だれかに言いつける」(-.24)・「大声をあげてどなる」(-.18) に対する値が有意であった。女子におけるパス係数は、SOC 得点から、ストレス反応得点 (-.47)・ストレス対処行動「ひとりで泣く」(-.39)・「ひとりになる」(-.29)・「どうしようもないのであきらめる」(-.27)・「だれかに言いつける」(-.25)・「ゲームをする」(-.25) に対する値、また、ストレス対処行動「ひとりで泣く」「どうしようもないのであきらめる」からストレス反応得点 (.19, .12) に対する値が有意であった。

【考察】男女ともに、SOC は直接的にストレス反応の抑制に関わることで、女子は、SOC が良好な者ほど一人で泣くことや問題の解決をあきらめることが少なく、これらがストレス反応を抑えることが示唆された。

【結論】小学校高学年の男女ともに SOC が高いほどストレス反応が少ないこと、女子は SOC が高いほど「ひとりで泣く」「どうしようもないのであきらめる」対処行動を取りにくくこれらがストレス反応を抑えることが示された。

(連絡先) 朴峠周子, 〒305-8577 茨城県つくば市天王台 1-1-1 筑波大学 総合研究棟 D

E-mail: shuko_hotoge@yahoo.co.jp